



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

映画の記憶

映画といえはやはり少年の頃の思い出です。私が生まれ育った田舎町双海町下灘にも、松竹系の双葉館と東映系の東映館という二つの映画館がありました。どちらの映画館も小学校の直ぐ下にあつて、屋根に取り付けられた大きなラッパのような拡声器で、その夜の上映予告の放送が、学校の窓から否応なしに聞こえて興味をそそられました。文部省推薦を除けば、子どもには映画の影響が大きいと、見ることを禁止されていたので、道すがら映画館の入口に張り出された、映画スターたちのポスターを、羨ましく見通るだけでした。それでも正月三ヶ日とお盆だけは親と同伴なら許可が下り、暗闇に映し出される銀幕の映像に釘付けになったり、スターのプロマイド写真の印刷されたパッチン（メンコ）を大事な宝物にしていました。

映画を身近なものに感じるきっかけは、小林旭と浅丘ルリ子が下灘駅界隈に

ロケにやってくるというニュースで、さしたる話題のなかった村中を駆け巡り、みんなでロケ風景を見に行ったり、出演した映画をはるばる松山の映画館まで見に行ったりもしましたが、その後町には何の変化も音沙汰もなく、ひっそりと静まり返っていました。

ある日、双海町役場で広報を担当していた私の元へ、「寅さんが下灘駅へ撮影に来ている」という耳寄りなニュースが入りました。早速取材をしようとカメラを提げて下灘駅へ向いました。撮影本番中とあつて駅舎の中へは関係者以外は入れませんでした。運よくワンカットシーンを撮り終えたところだったので、山田洋次監督にお願いして、寅さんの写真を撮らせて貰うことにしました。監督さんや主演の渥美清さんにもインタビューをお願いする予定でしたが、下灘に圧倒されてそれも叶わず、「町の広報を担当している若松といいます。写真を一枚取らせて下さい」と頼むと、渥美清さんは笑顔で「やあー」とたつた一言返してくれただけでした。寅さんにプラットホームのベンチに横になつて夢を見るあの有名なポーズと、プラットホームをカバンを持つて歩く姿を撮らせてもらい、その後はあつという間に駅舎の控室へ消えて行きました。連写でもないペンタックスの古びたカメラで撮ったモノクロの写真は、今も私の大切な宝物として大事にしています。

その後下灘駅は海岸部を埋め立ててバイパスが通つたため、日本で一番海に近い駅の称号は消え、相前後して無人駅になりましたが、私が手掛けた夕焼けプラットホームコンサートの影響もあつて息を吹き返し、伊予灘に広がる何も無い素朴な姿や青春18キップのキャンペーンポスターが反響を呼び、フィルムコミッションに登録されたこともあり、色々な映画に登場して話題をさらっているのです。

一方双海町の翠小学校も現役木造校舎では一番古いことから、映画もさることながらCMに度々登場するなど、学校らしいノスタルジックな学校として人気を集めています。現役の校舎ゆえに子どもの教育的配慮が必要なことから、かなりの制限があつて、撮影は夏休み等に限りられているようです。地元の人にとつて木造校舎は時代遅れな学校となり、少し気恥ずかしい感じのする時代もありましたが、今ではホテルとともに自慢の一つとなっています。まさに一周遅れのトップランナーでありオンリーワンなのです。

振り返つて下灘駅と翠小学校のような、地元の人さえ「何故? どうして?」と不思議がる何の変哲もないものが、何故映画のワンカットシーンとして脚光を浴びるのか、考えてみると幾つかのことが思い浮かびます。今作られている映画にはSF映画のように未来を先取りした

下灘駅での映画「寅さん」のロケ風景



ものもありますが、三丁目の夕日のような記憶を辿えらせる、過去をテーマにしたものもかなりあって、愛媛県内の田舎には都会には既になくなったものが、無意味的に時空を越えて残っていて、懐かしい記憶を思い出させる装置としての映画価値があるような気がするのです。何故なら映画鑑賞する映画館は殆どが都会にあり、映画館に足を運ぶ人の多くは都会に住む人なのですから、当然といえば当然かも知れません。

ひとところ映画やテレビの影響が社会を動かした時代がありました。映画やテレビのロケ地に選ばれると、多くの観光客がその現場を一目見ようとうごめくのです。NHKテレビの大河ドラマ、映画釣りバカ日記や寅さんなどを誘致しようとした過熱とも思える騒動も、それなりの経済効果はみられました。それが一過性のものである反省から、今はやや沈静化しているようです。それでも映画やテレビの影響は絶大で、ロケ地に取り上げられると地域の知名度は抜群に上がり、タダでさえ閉塞間の漂う地域を活性化させる有効な手段であることは、映画の街広島尾道を見れば一目瞭然であることは言うまでもありません。不便極まりない坂の街が、景観的観点から脚光を浴びるきっかけとなったのは、やはり映画のお蔭のような気がするのです。愛媛県でも行政と民間が手を組んで、フィルムコミッションを立ち上げ映画の素材になりうる場所をリストアップして懸命に売り込んでいますが、息の長い取り組みが求められるだけに、まだまだその取り組みは弱いようです。

最近映画の取り組みについて考えさせられる出来事が二つありました。ひとつは映画を自分たちで作ろうという動きです。今は精度の高いデジタルカメラが普及し、しかも趣味の域を超えるほどの技術を持った人が沢山いて、自主制作された映画を見ると、まるで玄人はだしの凄いい作品が作られています。それらはドキュメンタリータッチで社会問題を鋭くえぐり、大きな共感を呼んでいます。もう一つはこれまで上映されてきたお蔵入りの有名な映画を、映画館でなく身近な場所に少人数集めて、DVD映写でグループ鑑賞しようとする動きです。お茶を飲みながら、時にはコタツに入り寝そべって見る映画は、特にシルバード時代には好評のようで、希薄になりつつある絆作りに役立って、次の開催が待ち遠しいようです。

二本の 映画が街の イメージを大きく変える 何度も体験
「愛媛には 人に誇れる 場所多く
映画になれば イメージアップ」
「映画には どこか懐かし 郷愁が
記憶の底に 眠っているよう」
「寅さんに 『やゝあ』と一言 言われたが
ただそれだけの あの日ありあり」
(若松進一 笑売噺呵より)